Osaka University Knowledge Archive

Title	ニコライ・エヴレイノフの演劇論と上演活動における「身体」
Author(s)	篠崎, 直也
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59877
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	篠　崎　直　也（しの ざき なお や）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２６１３９　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**ニコライ・エヴレイノフの演劇論と上演活動における「身体」**
論　文　審　査　委　員	（主査） 言語文化研究科教授　堀江　新二 （副査） 言語文化研究科准教授　ヨコタ村上孝之 文学研究科教授　市川　明　　文学研究科教授　永田　靖 神戸大学国際文化学研究科准教授　楯岡　求美

論　文　内　容　の　要　旨

本論のテーマは演出家、劇作家、演劇研究家ニコライ・エヴレイノフ（1879－1953）の演劇論と上演活動における「身体」の問題である。エヴレイノフにとって「身体」は、そもそも法律学院生時代の卒業論文『ロシアにおける肉体刑罰史』（1901）からの一貫したテーマであった。彼の「演劇性」の問題は、特に今日における身体論の諸問題と重なっている部分が多く、後の様々な演劇論や哲学の先駆であると多くの研究者が見なしている。論文では、復元、感染、解放、制度化といった様々な位相における「身体」をエヴレイノフの演劇論とその上演活動を通じて考察する。

そもそも、肉体を用いることが一般的な前提条件である演劇において「身体」を論じるというのは自明のことである。しかし、それでもなお「身体」の復権が問題となっているという状況はまさに肉体ではなく「身体」が忘れられていたということに他ならない。演劇に限って言えば、当時のロシア演劇界は「身体」を意識するような空間を失っていたのである。

本論では全四章において考察するエヴレイノフの上演活動はそうした「身体」的な空間を劇場内に、または劇場を飛び出た社会全体に、さらには個々人の意識内にまで侵入して強引なまでに観客を扇動しようという試みであり、その上演のプロセスやその後の反響を考察することによって、彼の演劇論と実際の上演との間の差異を明らかにすることが目的となる。

考察の結果として期待されるのは、エヴレイノフのロシア時代における活動がより明らかになること、彼の演劇論や実践が20世紀の演劇史、思想史、カルチュラル・スタディーズといった文脈における位置づけられるのか、そして、現代におけるその応用可能性を示唆することである。

第一章では、エヴレイノフが初めて演出家としての活動を始めた「古代劇場」の活動の詳細を明らかにする。この頃発表した著書『演劇それ自体』でエヴレイノフは当時の自然主義演劇やスター俳優による紋切り型演劇を徹底的に批判し、演劇本来の「演劇性」が失われていることを指摘する。エヴレイノフにとって真に「演劇的」な時代は古代から中世であり、まずはこの時代の演劇の復元を試みる。

彼が注目したのは当時の俳優や観客の復元であった。肉体刑罰史などの研究を通して肉体そのもののみならず、肉体から生まれる空間や感覚、そしてそれが同一の空間にいる人々に感染していくような、広義の「身体」をエヴレイノフは既に意識している。

「古代劇場」における「身体」の復元は、「身体」を通じてある時代の上演環境そのものを俳優が体現し、さらにはかつての演劇的であった生活（エヴレイノフにとってはここが目指す所である）、そしてその「身体」が集団の個々に感染する様子を復元するという作業だった。復元された俳優の「身体」は、そのような演劇的な生活への献身であって、エヴレイノフが意図したのはこうしたより広義な意味での感染する「身体」、中世の「演劇性」を観客に体験させることであったと考えられるだろう。

第二章では、エヴレイノフ編著の『舞台における裸体』とコミサルジェフスカヤ劇場における『サロメ』を中心に論じる。「古代劇場」での過去の演劇の復元と平行して、エヴレイノフは過去の時代の演劇において、裸体が美の一つの象徴として扱われていたことに注目する。裸体もまた当時は宗教画のモチーフとして描かれた以外は包み隠されていたものだった。同時代のシンボリズムと相俟って、または写真の登場による裸体写真の流布によって、裸体は一つの流行ともなっていく。

裸体は「古代劇場」での「身体」の復元と共通の性格を持っているものの、さらに、現在でも変わらず存在し続ける裸体の直接性は検閲やモラル、芸術論争など別の問題を浮上させ、近代の「身体」が制限されてきた過程を浮き彫りにする。裸体の記号性が過去と現在では異なっていることに注目し、エヴレイノフはさらに「ありのままの身体」と「芸術的な身体」の効果の差異を指摘する。

「古代劇場」や『サロメ』の上演で、結果的にエヴレイノフはそうした復元によって現代の演劇を、さらには社会を演劇化することの限界を感じる。エヴレイノフはあくまで演劇人であり、実際の劇場空間、実際の観客が彼にとっては現実的な対象だった。エヴレイノフが復元した古代や中世演劇の要素はコメディやパロディという形で彼の創作の一貫した基盤となる。キャバレー劇場『歪んだ鏡』は

彼のそうした創作の芽が一気に開花した場であった。第三章は『歪んだ鏡』でのエヴレイノフを論じる。

演劇の復元で観客を巻き込むことに限界を感じたエヴレイノフにとって、自分が意図したことを観客に伝えるためには装置が必要だった。その代表例が彼の『モノドラマ序説』である。一人の人物の心象を舞台に出現させたモノドラマで、エヴレイノフは当時の心理学を用いながら、肉体と精神の関連を探究する。現実の社会を演劇化することの困難を痛感したエヴレイノフは、『自分自身のための演劇』において、極めて個人的な、個人の脳内での空想とささやかなその実現を演劇の一つの形として提示する。そうした個人の体験を集団で体験しようという試みがモノドラマだった。観客の「身体」はここでは劇場の大きな一つの「身体」の中に吸収される。

第四章では群集劇『冬宮奪取』を取り上げる。内戦を逃れ地方にいたエヴレイノフは、革命による社会状況の変化を目の当たりにする。エヴレイノフの望む形とは異なっていたかもしれないが、彼が変化させようとしていた社会は確実に変わっていた。モノドラマでエヴレイノフが試みていたことを、より拡大して実験できる可能性を彼は得る。

過去の演劇で試みた「身体」の復元と「身体」の感染、モノドラマで試みた集団を一つの大きな「身体」にすること、『冬宮奪取』ではそうした可能性の具現化を通して、大きな「身体」がメディアとして、より社会に対して強力に作用することをエヴレイノフは実感として感じていた。彼の中で常に煮えたぎっていた社会の演劇化への希求が噴出していく。しかし、それはプロレトクリト演劇との奇妙な符合を生み、その対立の中でエヴレイノフは結果的にロシアを出て行くのである。

こうした数々の上演活動を通じて、人間の「演劇的本能」を演劇以前に見出し、劇場を「演劇的本能」を活性化する場であると見なしていたエヴレイノフにとっての演劇とは最終的に個人の自由な想像力を拠り所とする「自分自身のための演劇」であった。そのためには、「身体」という感覚もまたより拡張したものとなる。同様に、「身体」が広がりを見せ、「リアルな身体」が曖昧になりつつある現代において、彼の実践は貴重な先例となっていると言えるだろう。

論文審査の結果の要旨

提出された論文「ニコライ・エヴレイノフの演劇論と上演活動における『身体』」は、ロシアの演出家、演劇研究家で、革命後はフランスへ亡命したエヴレイノフの演劇論と実際の上演活動を「身体」をキーワードにして論じたものである。

著者は、エヴレイノフの大学における卒業論文が「ロシアにおける肉体刑罰史」（1901年）だったことに注目し、エヴレイノフがせまい意味での「肉体」の問題から出発し、「復元」、「感染力」、「解放」、「制度化」といった演劇の様々な位相における広い意味での「身体性」を理論的・実践的に追い求めたと論じる。本論文は、エヴレイノフの演劇論と実際の上演を時系列的に紹介・分析しつつ、彼の演劇論と実際の上演との間の差異を明らかにし、その現代的な意義を示すことにある。

第一章では、「復元される身体」と題して、著者はエヴレイノフの初期の演劇活動、古代劇場の復元について紹介し、それが古代や中世における「演劇性」を観客に体験させる意図に基づくものであったと論じている。

また第二章では、「舞台における裸体」と題して、エヴレイノフがペテルブルグで上演したワイルドの『サロメ』が論じられている。ここで著者は、エヴレイノフが「ありのままの裸体」と「芸術的な裸体」を区別し、前者の持つ表現力を重視したが、当時の検閲によってそれが活かされなかったと述べ、しかし、そのコンセプトが現代では活かされていると論じている。

第三章では、「モノドラマにおける身体」と題して、エヴレイノフのキャバレー劇場「歪んだ鏡」における上演活動が紹介されている。これはいわゆる「独り芝居」ではなく、ある一人の人物の心象を舞台に出現させたもので、著者はエヴレイノフが、それまでの「古代劇場」や「サロメ」で限界を感じていた観客と舞台とをより密接に結ぶ「身体表現」を狭いキャバレー空間に実現しようとしたと指摘している。

第四章は、「マス・メディアとしての身体」と題され、エヴレイノフが後世に名を残した「群衆劇」＝「冬宮奪取」を紹介している。これは、1917年のロシア革命の「復元劇」で、１万人の俳優と15万人の観衆が参加する壮大なパフォーマンスだった。これを著者は「人間の持つ演劇本能の活性化」というエヴレイノフの演劇論の一つの必然的な帰結と見なしている。しかし、ソヴィエト権力が自発的な群衆のパフォーマンスを抑制する政策を始め、エヴレイノフのロシアでの活動は終止符を打たれしまった。著者はロシア時代におけるエヴレイノフの演劇観、そして多くは失敗に終わったその実験的上演が、現代の様々な「身体表現」の貴重な先例となっていると結論づけている。

これまで、ロシアでも日本でもエヴレイノフの全体像を明らかにする研究が皆無に等しいなか、著者は360点に及ぶロシア語・英語文献に目を通し、その全体像を明らかにしており、これは高く評価されるものである。また「身体」論を手がかりに彼の現代への影響を論じた点もおおむね成功していると思われる。一部論理の飛躍や説明不足が見られるが、致命的欠陥というよりは、今後の研究課題としてとらえるべきものであり、本論文の全体的な価値を低めるものではないという結論に至った。

上記評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。